五戸の三浦さんはどこから来たのか

村本　恵一郎
（五戸町教育委員会
教育課課長補佐）

五戸町は三浦姓の多い町である。正式なデータはないが、現在は人口に占める三浦姓の割合は約8％とも言われ、最も多い名字だ。人口の移動が少なかった昭和30～40年代の五戸小学校では、児童の10パーセント以上が三浦姓で、まさに三浦さんの町だった。

五戸町の発展に貢献した三浦さんは多い。近現代では、南部鉄道（株）の前身である五戸電気鉄道（株）の創業者で、五戸町長も務めた三浦善蔵や、農林大臣を務めた三浦一雄のほか、歴代五戸町長の中に三浦姓が多い。江戸時代には新田開発に尽力した三浦庄七、酒造業を営み豪商として名をはせた三浦伝兵衛など、地域の有力者を多数輩出している。

しかし、五戸町の三浦姓のルーツは謎に包まれている。五戸と三浦姓との繋がりを示す最初の資料は、1246（寛元4）年に鎌倉幕府の執権北条時頼が、後に三浦介を継承する平（佐原）盛時を五戸地頭代に任ずる古文書である。ちなみに地頭代とは、地頭の代理として現地に派遣された代官のことである。

旧南部鉄道五戸駅跡地に立つ「三浦善蔵翁之像」
＝2024（令和6）年11月3日・筆者撮影

当時の三浦一族の嫡流は三浦泰村だったが、翌年に起こった宝治合戦で北条方に敗れ、三浦一族は一端滅亡する。しかし、北条方との関係を築いていた盛時が、三浦一族の再興を許されるのだった。

次の資料は、1335（建武2）年に足利尊氏が三浦（介）高継に、五戸を含む領知を与える古文書である。この文書では、高継に三浦一族の本領である相模（神奈川県）、上総（千葉県）の一部に加えて、五戸だけでなく全国各地に領知を与えている。

当時は尊氏が征夷大将軍に任じられる前の南北朝時代前夜。混沌とした時代だった。高継が五戸に領知を得た当初、青森県は北朝（足利）が優勢だった。後に南朝（北畠）が優勢になり、高継の得た五戸の領知は有名無実化したと考えられている。

2点目の資料を最後に、江戸時代後期まで五戸と三浦姓の関係を示す資料は途絶える。突如、三浦一族が南部藩五戸通の有力者として力を持ったとは考えにくい。前述の資料は、五戸と三浦姓との繋がりを示す資料であり、盛時や高継が実際に五戸へ来たことを示す資料ではない。現在の研究では、来ていないという考えが主流とされている。

しかし、盛時や高継が実際に五戸へ来ていなくても、盛時や高継に近い三浦一族が代わりに五戸まで来て、地頭代の任を果たし、領知の統治を行ったことは想像に難くない。これらの三浦一族が南北朝時代、南部氏の下で木村氏が台頭する江戸時代を耐え抜き、力を蓄え、江戸時代後期になり歴史の表舞台に返り咲いたのではないだろうか。

1876（明治9）年の明治天皇東北巡幸の際、行在所に選ばれたのは「三伝」と称される三浦伝七宅だった。今に繋がる五戸町での三浦一族の隆盛を象徴する出来事だろう。

中世まで遡る青森県に関する歴史資料は少ない。加えて、北条時頼回国伝説に代表される伝承もある。虚と実が混在する中、五戸町と三浦さんの関係も多くの謎に包まれている。